

多摩川の名脇役

美しい丘陵の公園から多摩川を見おろす

7. 「調布浄水場跡」

(東京都大田区田園調布:多摩川台公園内)

多摩川八景のひとつ「多摩川台公園」の中にある「調布浄水場跡」は、当時民間経営の水道会社の一つであった「玉川水道株式会社」によって作られ、大正7年から昭和42年まで多摩川の水をくみ上げて浄化し、周辺地域に上水（水道水）を供給していました。

この浄水場を語る上で欠かせない、江戸～東京の発展と上水道の歴史、そして多摩川との関わりはどのようなものなのでしょうか。



(左から時計回りに)

調布浄水場跡／濾過池だった場所／沈殿池と濾過池を結ぶ門／濾過池だった場所／多摩川台公園からの夕日 (写真-H16.4撮影)

江戸っ子自慢の6上水



天正18(1590)年、江戸に入府した徳川家康は、農耕のための六郷や二ヶ領などの『用水』の開削と同時に、海に近く飲み水の確保が難しかった江戸に『上水』を引く事にも力を注ぎました。

まず、日本最初の上水と言われる「神田上水（小石川上水）」が開き、ついで承応3(1654)年に多摩川の水を羽村取水堰で取水した「玉川上水」が完成します。

江戸の人口が100万人を越えたと言われる最盛期には、神田・玉川・三田・青山・千川・亀有（本所上水・曳舟上水）の6上水が江戸中を潤し、川柳にも"江戸中をのたくり廻る井の頭・・・神田上水" "四里四方玉を流してみがく也・・・玉川上水"などと詠まれた程、上水の普及はめざましかったそうです。



この江戸っ子の自慢の6上水のうち玉川・三田・青山・千川の4上水は、いずれも多摩川を水源としていて、江戸っ子にとって多摩川はまさに生活を支えた川でした。

そして多摩川の水源である山々は、幕府の直轄地（天領）である「お留め山」として、伐採の制限や、焼き畑、開墾を禁じ、手厚く保護されていました。



江戸の上水から東京の水道へ

慶応3(1867)年10月、徳川慶喜は大政を奉還し、300年に及ぶ幕府政治は終わりました。

しかし明治維新が訪れても、依然上水の給水には木管が使用され、水質の悪い水が飲料水として使用されている状態でした。

ついに明治19(1886)年の夏、横浜にコレラが発生し、次いで日本橋、本郷、深川、浅草と広がり、患者数約12,000名、死者は約9,800名にのぼる大惨事となりました。そしてこの騒ぎに拍車をかけるように、コレラ患者の汚物を神奈川県西多摩郡長淵村（現在の青梅市長淵）で多摩川に流したというニュースが流れ、東京は大混乱に陥ります。玉川上水は宮内にも入っていたため大問題となり、玉川上水汚染の防止策の一環として、多摩地区の水路に関係ある村々が東京府に編入される事となりました。

更に、東京水道の水質向上のため「水道改良計画」に着手、木管から鉄管への変更や、明治31(1898)年には玉川上水の水を緩速濾過^{*}し、蒸気機関によって水道給水を行っていた「淀橋浄水場」が完成します。

そして、当時としては画期的な水道普及のキャンペーンを展開し、講演会や映画会、標語募集や歌謡曲「水の東京」「多摩の流れ」などの選定の他、旅行会や観劇会も行ったそうです。

水質の改善や、水道栓の普及、一大キャンペーンなどによって、水道使用者は倍増しますが、当然水の量は限られています。

しかも、幕府時代は直轄地（天領）として幕府と地元住民によって手厚く保護されていた水源林は、明治になると官有の「御料地」となって管理が手薄になり、乱伐や盗伐また放火などが乱発し、山は禿げ、水害もたびたび起こる状態でした。

そこで明治36(1903)年、当時東京市長であった尾崎行雄氏は、御料地である水源林の経営を東京市が行う必要性を感じ、調査をはじめました。

そして同年、御料地の譲受を完了し、今日につながる本格的な水源林経営がはじまります。



増え続ける東京の人口

大正に入り、東京市の人口は増え続け、飽和状態にまで達していました。隣接する近郊町村も発展し都市化が進み、行政や経済の一体化を図るために大正7(1932)年10月隣接5郡82カ町村を東京市に統合しました。

統合された市町村のうち約50町村には、公営水道と企業が独立して経営を行っている民営水道の設備があり、その中の一つである玉川水道株式会社によって「調布浄水場」が建てられます。

しかし、これらの水道設備は給水能力、水質、水道料金などの面で様々な問題あったため、まず公営水道を併合し、次いで昭和9(1935)年に玉川水道、昭和11(1937)年に矢口水道、昭和19(1945)年には日本水道を買収し、すべて市（都）営水道に統合しました。



東京市の人口増加に、隣接市町村の統合が拍車をかけ、東京の給水能力はすでに極限状態にまで達していました。

東京市では将来のために根本的な計画を樹立する必要があると考え、水道拡張事業に着手します。

その拡張事業の一旦として、村山・山口をはじめとする貯水池の建設や、東京市民の飲み水をまかなう為の大容量の貯水池になる「小河内ダム（奥多摩湖）」の建設が決定します。



浄水場から公園へ

小河内ダムの建設中、第二次世界大戦（昭和14:1939～20:1945年）が勃発します。

これにより水道拡張事業も中断しますが、戦後再開され昭和32(1957)年11月26日、ついに貯水量約2億 m^3 の水道専用貯水池である小河内ダムが完成しました。

この小河内ダムが完成した昭和30年代まで、多摩川の水は東京都の水道の約8割を占めていましたが、水源を分散させ、慢性的な水不足を解消するため、多摩川は約2割、残りは利根川と相模川によっての水道水源をまかなうようになります。

調布浄水場も小河内ダムの完成と同年、その役割を終え、それまで給水していた地域には、現在相模川を水源とし、神奈川県川崎市にある長沢浄水場で浄化された水が給水されているそうです。

建設にまつわる経緯や、役目を終えた理由などは、統合などの問題により明確な資料が残っていませんが、現在、沈殿池だった所には池をつくり湿性植物が植えられ、濾過池だった所には四季の野草などが植えられ、地下の配水池だった所には雨水をためて池の補給水として利用し、当時の姿をできるだけ残すように多摩川台公園管理事務所によって管理されています。

古代の人々が築いた古墳があり、春になると咲き乱れる桜や多摩川に沈む美しい夕日を見せてくれる多摩川台公園にある「調布浄水場」の跡は、多摩川をじっと見下ろし、蛇口をひねると惜しみなく流れてくる水道の歴史を見つめ続けてきた大切な証人として、静かにそこにあります。



そんな場所に立って、一緒に多摩川を見下ろし、私たちの大切な"水"についてもう一度考えてみてはいかがでしょうか。

* 緩速濾過（かんそくろか）

- ・・・ 1829年に英国のJames Simpsonが開発した砂濾過法で、戦前までの日本では、上水道のほとんどがこの濾過法を使用していました。
細かい砂の層に1日3～6mという遅い速度で通過させ濾過させる方法で、砂層の表面にできた微生物の粘着質膜によって、細菌や藻類、油やアンモニア、有機物や臭い、病原菌までも除去することができます。
しかし、濾過速度が遅く、広い敷地が必要な事から、現在はほとんどが「急速濾過」法を使用しています。